
異世界にdive!!

宮原葉月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異世界にdive!!

【Nコード】

N8166K

【作者名】

宮原葉月

【あらすじ】

俺は女の子を守るためにトラックに轢かれた。

神様の優しい(?)計らいで俺は異世界の救世主(勇者)として二度目の生を貰った。でも、女になってしまふのは悲しいな……男に戻る術を手に入れた。

完結しました！

新シリーズは修正が終わるまでお待ちください。。。

キーワードを修正。

プロローグ（前書き）

完結に伴い文章修正。

プロローグ

俺、佐村 優はどこにでも居るごく普通の中学生。
ある日それは起こった。否、起こってしまった。

女の子がボールを取りに道路に出た時だった。
大型トラックが迫ってきた。

俺は、女の子を助けに道路に飛び出したんだ。
女の子が怪我をしないように抱えて俺は、トラックに轢かれたんだ。
何とも言えない激痛が俺の身体中を駆け巡った。
俺は神様に祈ったんだ。(どうか、女の子だけは無事でありますように！)って。

俺、死んだのかな？

俺の周りは光だけだった。

「おぬし、女の子を助けるために自分を犠牲にしたのだな？」老人
が俺に話しかけた。

「おじいさん、誰？」

「神様じゃ！ 可愛そうだから別の世界で生を与えよう。今の記憶
を引き継ぎ、チートじゃ！ 凄じゃろ！？」

ああ、やっぱり死んだんですね。

「いいですよ……」俺は承諾してしまったんだ。

「ちなみに、女の身体じゃからの？」

「はい——って、なんで女の身体なんだよっ？」

「勇者じゃぞ！ 年齢はそのままでもいいじゃろ。じゃ頑張ってお
くれ。そっちの世界では仲間を付けておくからの、私の可愛い孫よ」
「ちよつと待てええ！ くそじじいいい！」

その言葉を最後に俺の意識は落ちたんだ。

「うう……。神様、こうゆう移り方って嫌だぜ」と独り言をつぶやきながら上半身を起こす。

俺は胸があることに気づく。そうか。女になるって言うてたっけ。意外と俺は順応性が高いのだ――諦めが早いとも言っ――多分ね。

俺は、集落を見つげるために歩き出した。

目の前には、剣と日本刀が置いてあった。

俺は好奇心で持ち上げてみた。

日本人だから日本刀を。

シヤナの持つている刀にそっくりだな。と俺は思ってしまう。

なぜ、そんな事を言うかという俺はライトノベルが好きだからだっ！ 特にシヤナはっ！ 格別だ。

「おお！ 勇者様……」俺はその声の方を向いたんだ。

俺と同じぐらいの年齢の男が立っていた。

俺は日本刀に消えると念じてみた。日本刀は消えた。うん。ファンタジーだな。

――ついでに、剣も消しましたよ？

その男は俺に近づき俺の胸を揉んできやがった。

「あんっ！」俺の声だよな？ 嫁に行けないっ！

俺はその手を振りほどき

「なんで、揉むんだ！」と言った。

「……それより、村にいきましょー」くそ、無視したな！？

男は俺にお姫様抱っこをすると村に向かった。

「俺は佐村 優。あつ、名前は優の方な。お前は？」

「サイトだ」

「サイト、寒いんだけど？」俺の言葉を聞いたサイトは上着を脱ぎ俺に着させた。

村に着くと同時に俺は、弄ばれた。

風呂に入れられたり、着せ替え人形にさせられたり……等々。

「サイト、俺死んじゃう」

「大丈夫だ。俺がついてるから」いや、お前の方がよっぽど危険なんだが？

だって、胸揉んでくるし。

俺はサイトを蹴り飛ばして、身の安全を確保した。

程なく、睡魔に誘われる俺。

「睡魔が……。おやすみ」俺は誰にも聞こえない様に呟いて、布団にくるまって寝た。

これが夢だと……信じて。

プロローグ（後書き）

皆さん初めまして。

初めて異世界&a m p・勇者モノを書きます。

では、これからしばらくの間お付き合いをお願いします。

1話（前書き）

6 / 2 2

執筆完了。

6 / 2 3

修正。

9 / 0 5

修正。

1話

「あんっ！」俺は変な感じで起きた。

隣では、サイトが俺の胸を揉みながら寝ている。

「この野郎っ！！」俺はサイトを蹴った。当然の報いだろっ。多分。
「ぐっ！！」サイトはうめき声を出しながら壁にぶつかる。

俺、このぐらい力あったっけ？神様がくれた力か？
気をつけないとな。

サイトに近づき生きてる（心臓、呼吸）かを調べる。

大丈夫だ。気絶しているだけだ。

「サイト？ 大丈夫か？」

「まあな」サイトはそう言いながら少しよろけながらも立ち上がった。

気絶から復活するのはやくね？

「それより…お腹すいた」

「ああ、食堂でも行くか。お前は勇者だから豪華な食事が出るぞ」
豪華な食事が。悪くはないな。俺はこの時だけは勇者になって良かったと思った。

サイトの案内で、食堂に行った。

サイトは俺に話しかけてくるが朝の事があるので、無視をした。
そうこうしているうちに食堂についたようだ。

「お前はここに座って食べる」サイトが言ったとおりにした。
俺は座ると日本人として挨拶をした。「じゃ、いただきますっ！」
と。

うん。このクロワッサンみたいのおいしいな。このステーキもいけるかも？

おいしかった。

「ご馳走様でした。料理、美味しかった。ありがとう」

皆、俺を見て目を見開いて驚いている。

この世界じゃ挨拶もないのか？

「おい、この世界じゃこうゆうことしないのか？」

俺はサイトに耳打ちをした。

「しない」

なんてゆう世界なんだ。

「俺、部屋に戻ってるからな」

「ああ」

よし、魔法の練習が出来るな。

俺は立ち上がり自分の部屋に戻った。

「さてと刀を出しますか！」闇を出し刀を出す。

まあまあかな？ イメージとしては4次元ポケットから道具を取るように。

ふと、俺は刀に指輪がはめ込んであるのに気づいた。

好奇心で俺は指輪を取り自分の指にはめてみた。

俺ははめた指輪をじっくり見る。

宝石・・・色は表面が黒で中は金色ですか。

好奇心で指輪に魔力を注ぎ込んでみた。

指輪が光りだした。うん、思った通りだ。

俺は眩しさのあまりに目を閉じた。

「私を封印から解いたのはお前か？」俺は目を開けた。

目の前には黒髪に瞳は金色の少女が立っていた。

やばい、好みのタイプだわ。

「魔力を注ぎ込んだ」だけ」だけどね」

「その魔力で封印が解かれたの」

「私は優奈。神よ。」

「俺は佐村 優、性別は男。でっ、なんで指輪に封印されていたんだ？」

「私は他の神によって封印されたの。なんか気に入らなかったからみたい」優奈は顔色が悪くなっていた。

よほど、嫌なことだったらしい。

「そんな事で封印されたの？」

「まあね。色々とあるのよ」

「これからよろしくなっ！ 優奈っ！」

「うん、こっちこそよろしくね！」優奈は笑って俺に言った。

うっ、可愛い。抱きしめたいと思うが自重する。

「よし、これから魔法を練習しようと思うんだ。だからここにいてね？」と俺は言うが、優奈はそれを拒否する。

「やだっ！ 私も行っ！ あっ、優は魔法よりも神力じんりきが合うと思うよ？」

「そうか？ でも先に魔法を極めたいし・・・」

「じゃ、私も魔法覚えるっ！ だから一緒に！ ねっ？」優奈は上目遣いをして俺を見る。

上目遣いを使う美少女なんて……反則すぎる。

「わかった……じゃ、中庭に行くぞ」

「すごいねっ！ 30分で神力を使えるなんてっ！」優奈は目を輝かせて言っている。

「そうなのか？……でも優奈もすごいぞ！」

「そうだよっ！ 前の勇者は数ヶ月掛ったらしいよ！？」スルーされた！？

「そうなのか、神力で元の姿に戻れたりするのか！？」戻るのがどうか聞きたかった。

「うーん……戻るのかな？」

「よし、（多分）魔王を倒して元の世界に戻るぞー！」

はつきり言つと元居た世界に戻らなくても、男に戻ればいいと俺は思っている。

どうせ、交通事故で死んだと思うし。両親今頃どうしてるかな。

「倒しても元の世界に戻るかはわからないけどね？」

「そうだね。」

「優奈は神様なんだろう？ だったら『おじいちゃん』を知っているか？」

「うん、知っているよ？ それがどうかしたの？」

「会いに行きたいんだ」

「いいよー！ さあ、行こう！」

突然優奈の右隣が光った。

「呼んだかの？」

「っ！」 優奈は右膝を附いた。

「どうしたんだ、優奈？」

「私より、位が上なの」

「そうなんだ？ おじいちゃん、男に戻せ！」

「無理じゃの」戻れないだと？

「なんでだ、じじい！」 俺はそう言い闇から刀を取り出し切っ先をじじい（神）に向ける。

「転生する時にいったら？ 元の体はボロボロになっていて使えないと！」

あれ、じじいが俺と同じぐらいの歳になったぞ？

「気にするな」

「心を読むな！」

「じゃ、じじいを倒してこのイライラを静めるよ！」 俺は刀を振るつたが壁みたいな物で防がれた。

「っ！ 今のままじゃ無理か」 俺は舌打ちをすると刀をしまった。

「優には魔王を倒してほしい。チート（反則）な力をやったろ？」

あれで倒すんだ！ じゃ、がんばれ」と言い終わるとじじいは消えた。

「じじい、いつか……必ず！」

「優？ 黒いオーラが出てるよ」

優奈は怯えていた。トラウマなのかな？

「ごめんね」俺は優奈に謝りオーラを消した。

気づけば、夕方だった。

「今日はこれでおしまい」優奈はそう言った。

「ああ、明日もよろしくな！」俺は短く答える。

優奈は笑顔で手を振り、指輪に戻って行った。

「さてと、夕飯を食べますか」俺は、独り言を言い食堂に向かった。

食堂に向かっている最中に後ろから気配がした。

俺は立ち止まり「誰だ？そこにいるのは」と言う。

「ふはは！！ 流石だなあ？」

「うるさいんだけど？てか帰ってくんない？迷惑だから」

「じじいが転生させる程の人間だなあ？ ますます気に行つたぜ！

！ 俺様は早弥だ！！」

「その早弥がどうしたんだよ」俺の頭の警報機が鳴り響いている。

「簡単だよ」

この早弥が会わなければ、俺はこの世界で”魔王”を倒してから普通に生活するはずだった。

1話（後書き）

宮原葉月です。今回は途中で執筆を終わらせました。早弥（神様）は優にいたい何をするのか――？
それでは、2話をお楽しみに。

2話（前書き）

9 / 0 5 修正。

2話

どうも、優です。・・・えっ？もう知ってる？

はやく、始めろって？

じゃあ、本編スタートさせるよ。

「じじいが転生させる程の人間だなあ？　ますます気に行つたぜ！

！　俺様は早弥^{はやみ}だ！！」

「その早弥がどうしたんだよ」俺の頭の警報機が鳴り響いている。

「簡単だよ」ああ、聞きたくない。

「俺様が、お前に能力をやる。その代わりにこの世界で魔王を倒したら別の世界に行つてもらふ」

能力？　いらないよ

「断るっ！」俺はそう叫ぶ。

「まあ、拒否権はない。好きな時に世界を渡つてもらふ。いや、渡つてください」

なんだと？　早弥がお願いをするだと！？

「お前、俺より権限が高いから？」なんで、俺に聞くのっ？　てか、権限ってなにさ！！

「あのじじいが最高神なんだ」

ふーん、あのじじい最高神なんだ。

「それで？」

「お前はその使い魔的な感じ？……実は俺様の暇つぶしだったり？」

「本性現しあがったなっ！……どっちしても俺は断る！！」俺は早弥の足に拘束魔法をかけ食堂に向かった。

「拘束魔法解いてからいけ！」と廊下からこだましてくるが無視して席についた。

「いただきます」

俺はお腹が凄く空いているので早食いをする。早食いは体に悪いけどね。

「ごちそうさま」お腹いっぱい。さてと部屋に戻って寝るか。

俺は自分の部屋に帰る。

自分の部屋から気配がする。まあいいや。

俺は扉を開き、ベッドに寝た。

うん、隣に居るよ・・優奈が。

俺は叩き起こそうとするが、気持ちよさ様に眠っているため起こさずに隣で寝る。

ん？　なんか柔らかい……抱きごこちがいいなこの抱き枕。

「あんっ！」いやゝ実にリアルな夢だね。

そう、俺は今夢で優奈の胸を！！

「ゆうつっ！」バチンッ！叩かれた。

「痛い！？」俺は目を開ける。

そこには、優奈の胸に俺の手が置いてあった。

「優の、へんたあい！！」と優奈に蹴られて壁に突っ込んだ。

そして、俺の意識はここで途切れた。

「もう、先に言ってくれれば……私は」と優奈が言っていたが優には

聞こえなかった。

2話（後書き）

遅くなり、すみませんでした。
短い？許してください！！

3話

皆さん、久しぶり！ 佐村 優さむらい ゆうだよっ！

いやー、昨日はひどい目に会いましたよ……。

身体が壁に埋まったからね。あれは痛かったぜ。

あれから俺が優奈を見ると、視線を逸らして頬を赤らめていた。あれ、フラグ立てましたっけ？

さてと、魔法の練習でもするか。

俺は優奈に中庭で魔法の練習をしてくる、と言い残してから中庭に出た。

俺は魔法の練習をしてい……なかった。

一人だとなぜか上手く出来ないのだ。俺が優奈にこ……ん……なにも依……存……しているとは……はあ、情けないや。

仕方がない……日本刀の方を鍛えるか。

こう見えて俺はあ……っ……ち……では、剣道をやってた……や……ら……されて……いた。ふう、と息を整えて一閃する。

俺は、啞然してしまふ。……だって刀を振ってただけなのに、裂け目が出来てるんだぜ。

「これって、すごい刀なのか？」

だったら、気をつけないとな。振るう度に空間が裂けてしまっていたら、（高確率で）大変な事になってしまうかもしれないな。

——とりあえず、優奈に謝らないといけないな。母さんが女の子が怒っていたら、まず男《自分》から謝れって言うてたもんな。

俺は、部屋に戻る。優奈に謝るために。

優奈は…部屋に居るな。俺は気配を探して部屋に居る事を確認した。

ドアを開けて、優奈の前に行く。

「あ、あのさ。優奈…」

「な、何かな？」と、どこか落ち着きなく更に頬を朱色に染めて言う。

「ごめんな」

「えっ？」

「…胸を触ってしまったて」

「あっ……」思い出したのか、さっきより更に朱に染まる。

「ごめん！」

「ううん。気にしないで」と笑顔で言ってくれた。

その後、俺達は一緒に魔法の練習した。

優奈の顔ばかり見ていたのは内緒だ……

3 話（後書き）

ネタ探しをしてきた宮原葉月です。

さて、今回も短かったですね。

ネタが無くて停滞してました。すみませんでした。

お気に入り登録してくれた人に申し訳ないです…という事で投稿しました！

痛い！ 物、投げないでっ！

4 話どうしよう………

4話（前書き）

今年の投稿はこれで最後かと思われま

す。
（いい加減、受験勉強をしないと。落ち^{不合格}てしまう！）

4話

優奈と一緒に練習をした俺——佐村 優——は、絶好調だあああ
あ！

……気持ち悪いですね。すみません、調子に乗りすぎました。

「優っ！ あ、あのね！」

「優奈、何？」

「……やっぱりなんでもないっ！」と朱色に染めて言う優奈。

これは優奈と俺の会話だが、これが数十回以上も繰り返している。
なぜ、こうなったかという……自分でも分かりません。

逆に俺が聞きたい。俺は何をしたのか？と。

ぐうと、お腹が鳴った。俺のバカ！

「一緒に飯でも食べに行こうか」

「う、うん……」とまだぎこちない俺たちだった。

食事を食べ終わると、ぎこちない雰囲気だったのが、少しだけだ
が柔らかくなっていた。

「優。明日、市場に行かない？」

「市場か？ そういえば行った事無いな……。よし行こう」

外を見ると、陽が地平線に沈もうとしていた。——この世界には、
魔法で灯りをとるものがあるのだが基本は原始生活である。

「今日は、寝るか」と言っ、俺は優奈を見た。頬を朱色に染めて
俺を上目遣いで見ていた。

俺は、それを見て胸の鼓動が早まる。——身体は女になってしま
ったが、心はまだ男なんだ。と歓心する。

「優、あのね。い、一緒に寝て！」

——今、優奈はなんて言った？

「優奈？」

顔だけじゃなく耳までも朱色に染まっっていて、唇を尖らせて僕を上目遣いで見つめる。

「一緒に寝てって言ったの！ 優の… いじわる」最後の方は小さかったので聞こえなかった。

それにしても、一緒に寝てって……。

俺は、ベッドの傍に行つて優奈に寝ようぜ、と言つた。

俺がベッドに横になつて、数分経つた時に優奈が俺の隣に横になり、俺の身体に密着する。

「ゆうな？」

「何？」一見普通の会話をしていると思うが違つた。

何が違つて？ 優奈が…。瞳は涙で潤^{うる}んでいて、唇も濡れていて上気している。——何が言いたいかというと、優奈が色っぽいんです。

「…なんでもない。おやすみ」

「おやすみ、優」どこか嬉しそうな声音で言う優奈。

寝ようとするのだが、背中に柔らかく温かいものが当たつてそれが気になり眠ることが出来ない。

「ゆう、触りたい？」なつ、優奈起きてたのか！

「優奈、起きてたのか？」

「神様だから眠らなくていいの」

「そうか…。離れてもらえるとありがたい」

「いや、なの？」不安そうで、今にも泣いてしまいそうな表情になつてしまった。

「いやじゃないよ！むしろ、触りたい…。ってああああ！」しまった、つい本音が出てしまった。

優奈に、白い目で見られてしまう！——よし、死のう…。

どのぐらいの静寂の時間が流れたことだろう。少なくとも俺にはそう感じられた。

「優なら。いいよ」恥ずかしげな表情をしながら、上の服を脱いで下着姿になる優奈。

その静寂を破いたのは優奈だった。

触って欲しい、と思いが感じ取ることができる。

俺はおそろおそろ優奈の胸に手を伸ばして……。

触れた。柔らかくて、温かくて、乱暴にしたら壊れてしまいそうで俺は優しく揉んでみた。

んっ、と優奈が色気づいた声が耳に入ってしまった、俺の中の何かの『スイッチ』が入れ替わった。

ここから先は、あれなので…。

優奈と俺の関係は治り、更に進展した——とだけ言っておこう。

4 話（後書き）

はじめましての方は、これからお願いします。
ひさしぶりの方は、遅れてしまいすみません。
宮原葉月です。

今回は、何を間違えてしまったのか……。あんな展開にしまい
ました。

『H + P ― ひめぱらー』より過激ではないよね？ …… 大丈夫でした。
さらっと本をおすすめしてみたり。

では、2010年も残り2か月です。早いね！ 受験勉強しないで
僕は何をやってるんだろ。小説を書いてるんですっ！
では、皆さん良い年を！！

5話（前書き）

あと何日後にクリスマスですね。
自分は、関係ないですが。あれ、目から汗が出てきた・・・。
それでは、本編どうぞ。

5話

鳥の鳴き声と、太陽の陽が窓から入ってきている。朝なのだ。

俺は、起きると隣で寝ている優奈に微笑む。——昨夜、何があったかつて？ それは秘密だ。

さて、最近分かったことなのだが魔法で一時的にだが男に戻る事が出来るようになったのだ。

俺の魔力量は無限だからずっと出来るんだけどな。

「ご飯をいちゃいちゃしながら食べ終わり、いつも通り中庭で”神法”の練習をする。

「もう少し、構成をきっちりした方がいいんじゃない？」と優奈から指摘された。

「そうだな」優奈の方が神法の扱いに慣れているから、俺は従っている。

「優、今日はもう終わりにしよ」

そういえば、市場に行こうって誘ったんだったな。

「ああ、そうだな」

「市場に行きましょう」

俺と優奈の二人で城から抜け出して市場に来たのは良かった。そこまでは。

市場のものすごい規模により迷子になってしまったのだ。

「迷子になってしまったな」辺りには”城”が見えず辺り一面ヒマワリみたいな花が咲いている。

——そう、俺は方向音痴なのだっ！

「そうだね。……でも、私は嬉しいよ」と優奈は熱を帯びた視線で俺を見つめて言う。

その妖艶な姿をしている優奈を見て俺は、我慢が出来ずに、キスを

してしまう。

「んっ……。駄目だっば、外でなんて」と優奈は顔を染めて口ではそう言っているが嫌がってはいなかった。

「俺は”お前の事が好き”だ」

それを聞いた優奈は顔を真っ赤にさせて思考を停止させていた。

5 話（後書き）

こんばんは、宮原葉月です。さて、今回はぐだぐだと長くいつちやいますよ！

えっ、短く済ませろ？

さて、言葉は無視します。

クリスマス。それは、ネタに出来るもの。

あ、携帯の電池が。。

6話（前書き）

私立合格しましたので、投稿します！
公立ではないので連載計画は未定です。

6話

俺達は花に囲まれて夕陽を見ていた。——花が夕陽に照らされて輝いている。

きつと、夜に見てもきれいに見えるだろう。

「ゆ、う」優奈は俺の名前を甘くささやいてくる。

「優奈」またキスをしようかと顔を近づけようとした。

「きゃああ！」とどこからか叫び声が聞こえてきた。

俺は途中でやめて、声のした方向を見る。——男三人に囲まれている少女が瞳に涙を溜めて叫んでいた。

遠くからでも男たちが”何を言っている”か分かる。

「気に入らないな」とつぶやくと俺は走り出した。
間に合ってくれよ。

目前になったところで、殴るターゲットを^{目標}決める。

そして、俺は拳を振るった。殴ると相手は3メートルぐらい吹っ飛んでいった。

俺は青ざめている子分を睨むと更に青ざめて悲鳴を上げて逃げた。
いった。

改めて、自分の力に驚くが近くにおびえている少女が居るということ
とを忘れない。

「大丈夫か？ いや大丈夫じゃないか」と声を掛けてやると少女は、
俺に抱き着いて肩を震わせて泣いてしまった。

泣いて落ち着いたのか、がばつ！ という勢いで俺から離れた。
「落ち着いたか？」少女は羞恥心^{しゆうちしん}からか、顔を真っ赤にさせてうつ
むいている。

そつだろう。”見知らぬ男”に抱きついたのだから。

「……はい」

俺の背後にはすでに優奈が微笑んでいるが目が笑っていない。気配からは浮気モノとか、女誑たらしと読み取れる気が……。

俺はただ安心させようとしてるだけなのに。

「優奈。この娘を連れて帰ろうと思うんだけどいいか？」

「ええ。そうね」どこことなく不機嫌ふきげんそうな声音だったが、了承はしてくれたので俺は空間転移ワープで城に帰った。

6 話（後書き）

「誤字脱字、文法間違い、指摘」お願いします。

番外編（前書き）

番外編なので本編とのストーリーとは関係ありません。

番外編

私は優の”ある一言”を聞いて思考を停止させていた。
その”ある一言”とは、「俺は”お前の事が好き”だ」

私は、”神”。それで優は元”人間”。——でも、今は神。……
これって、好きになってもいいよね？

「優。私ね、優の事が好きなのっ！」

「だからね……」と私は言っ、優に”強引にキス”をした。

「優奈、ちよつと！」と優が言ってくるが、そのうちに目がとろん
として、眼が据わり顔を上気させて、私を見つめている。

静寂の中で舌と舌がつくりだす、水の滴る音したたが響く。

「んちゅ……」

私はいったん離れてゆう、と甘い声で名前を呼んだ。

その時だった。優が私を押倒したのだった。

身体じゅうが甘い刺激に襲われ——思考が快感に支配されて、それ
以外の事を考えられなくなってくる。

「ゆうふう。……あん」

「ああ。すうき！ いあああ！」

そこで、私の意識は失った。

ふと感じる。——ここはベッドだと。

私は上半身を起こして周りを見渡す。みわた

そう。あれは夢だったのだ。

番外編（後書き）

ピンクシーンを試験的に使ってみました。僕にはまだ早すぎたみたい……。

おしらせ

3月11日に三陸沖で発生した観測史上最高 M9・0の地震により、とても執筆できる状況じゃありませんでした。

そのため今月予定していた、以下の作品を来月に延期します。

- ・神様のお願い
- ・僕と幼馴染みと……僕は女の子じゃない！
- ・俺と紗耶香と世界！！

なお、地震前に投稿した「僕の現実逃避」と「異世界にdive！」の来月分はお休みします。

楽しみにしていた方には申し訳ありませんが、よろしく願いします。

字稼ぎ。

あ

7話

寝どころである城に空間転移で帰ってきた。

今回は、知らない少女を連れてきている。ここがもし元の世界だったならば、誘拐犯ゆうかいはんになつていたかもしれない。

しかし、なんでだろうか。――さっきから少女が目を輝かせて辺りを見渡しているのだ。

「君の名前はなんていうんだ？」

少女はこちらを向いて俺の眼を見る。

「わたしの、おなまえ？ ……しい。しい、っていうのっ！」少女

――しいちゃんは笑顔で答えた。

この笑顔を見ていると俺は――っていかん！ 危なかった。しいちゃんの魅力に飲み込まれるところだった。

優奈がまた俺の事を冷たい視線を浴びさせる。なんでだよ。はあ、やっぱり俺が悪いんだろうなあ。

きゅう、と可愛らしい音かわいが鳴る。どうやら音の発生源はしいちゃんからのようだ。

「しいね。おなか、すいちゃった」

「じゃあ、夜ごはん食べに行こうな」としいの目線に合わせて言った。

「うんっ！」

相変わらず優奈の視線は冷たかった。

俺はサイトにしいの分の夜ご飯を出すように、と命令を出した。サイトがすぐにいいぜ、と言わなかったのでお仕置きをしてやったらしぶしぶといった感じで了承してくれた。

「このおりょうり、すごいねっ！」

「これが普通なのよ」さっきまで黙っていた優奈が冷たく言った。そんな優奈の受け答えを無視してしいちゃんは喋った。

「そういえば、おにいちゃんとおねえちゃんってこいびとなの？」
途端、優奈の顔が真っ赤に染まった。

「そうかもな」

俺がそう言ったら、優奈は気を失ってしまった。

しいちゃんが心配そうな顔していたので大丈夫だよ、と言って安心させた。

8話

ご飯を食べ終わった俺たちは風呂に入り終わって部屋にいた。既にしいちゃん、すやすやと寝ている。俺は息を吐く。

「優。この娘が好みなの？」

俺の頭の中では、小さい女の子が好きなの？ と翻訳された。

「優奈が一番だよ」と言っ
て抱いて唇を交わす。

「ほ、ほんとに？」俺はいつたいなにやっ
てるんだろっ。

「ああ」とすると優奈の変なスイッチでも入ったのか別の世界へと飛んでいった。
妄想

優奈が元に戻ったのは、深夜1時ころだった。こつちの世界に来てかなり経ったが1日が元の世界と同じ24時間だと知ったのはつい最近のことだ。

「優様。失礼ですが王が呼びです。会ってもらいますでしょうか？」
「おいおい、深夜だぞ。時間をわきまえろよ。」

「朝ではダメなのか？」と俺は最後の抵抗を試みることにした。

「はい。すみませんが取り急ぎの用件なので……」

「わかったよ」俺は重たい目をこすりながら何処なんだ、と聞くと何故か王の私室に案内された。

なんでも、王の”私情”らしい。——私情なら夜中に呼ぶなと思っ
たのは俺だけか？

俺は今、”なぜか”王の私室にいる。

「聞いておるかの？」

この人、王って感じがしないんだよな。

近所に住んでいるじいさんみたいだ。——やば、少し前の世界の事
思い出してしまったぜ。

「いや、ごめん思考が飛んでた」

「そうか。……簡単に言うところに一生暮らしてもいいんだぞ、ということのなのじゃが」

「一生、ここで暮らすか。……それも良いかもしれんが、俺は世界を知りたいんだ。だからそれは冒険が終わってからで構わないか？」

王が了承してくれたので、この話は終了した。

そして、俺は部屋に戻った。

エピソード

鳥のさえずりが聞こえる。——という事は朝だっ！

俺は起きて、窓の方まで行き空を見る。旅立ちに最高の日だ。

ベッドから布がこすれる音がしたので振り返ってみるとしいちゃんと優奈が起きていた。

「俺、旅に出ようと思う」

「しいもつれてて！」

「優……」

予想はしていた。優奈も来るんじゃないかって。

でも、しいちゃんは予想外だった。

「ああ、いいぜ。昼過ぎに門に集合な」と俺は伝えると旅へ出るための準備に入った。

準備と言っても特にすることはないが、あえて言うなら王から貰ったお金を時空魔法で入れることくらいか。

そして、お昼を伝える鐘が鳴ったところで門に移動する。

「優、遅いわよ」どうやら俺が一番遅かったみたいだ。

「悪い、色々とやっていたら遅くなった」しいちゃんも既に準備万端だ。

「しいね、はやくたびにでたいのっ！」

「行くか」

久しぶりの門の外の世界を楽しむ。

俺の物語はここからだぜ！

「優、待つてよっ！」

「おいていかないでっ！」

後からついてくる優奈としいちゃんを見て俺は微笑んだ。

エピソード（後書き）

「異世界にdive!!」はこれで区切りとします。

今後の予定としては、「異世界にdive!!」の数年後を描いた小説の投稿と修正作業に入らせていただきます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8166k/>

異世界にdive!!

2011年8月27日18時00分発行